

《森里川海ふるさと絵本》

ありがとう あらかわ

— 荒川区 —





—あらかわをはじめりから海まで見わたしてみた！—



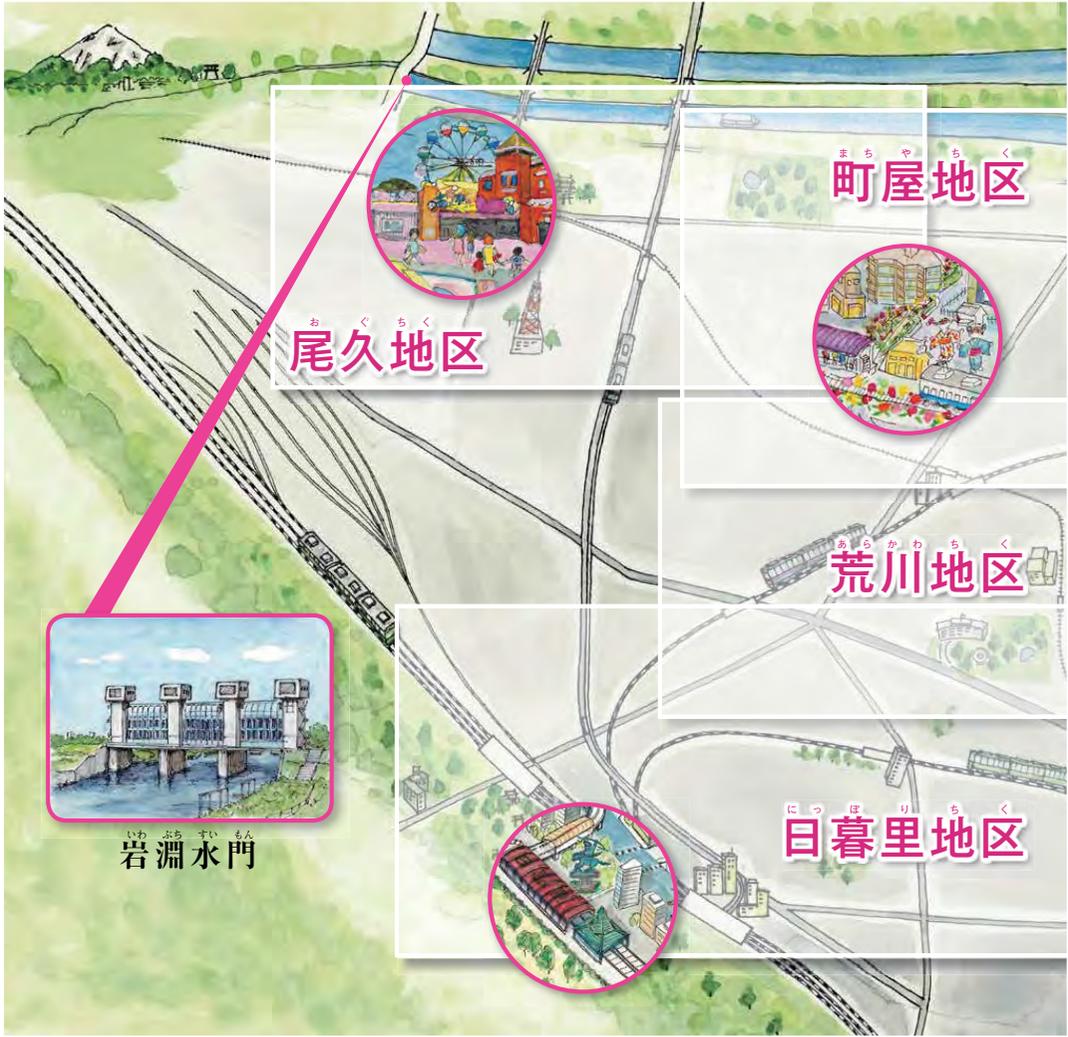
《 森里川海ふるさと絵本 》

ありがとう あらかわ

— 荒川区 —



環境省



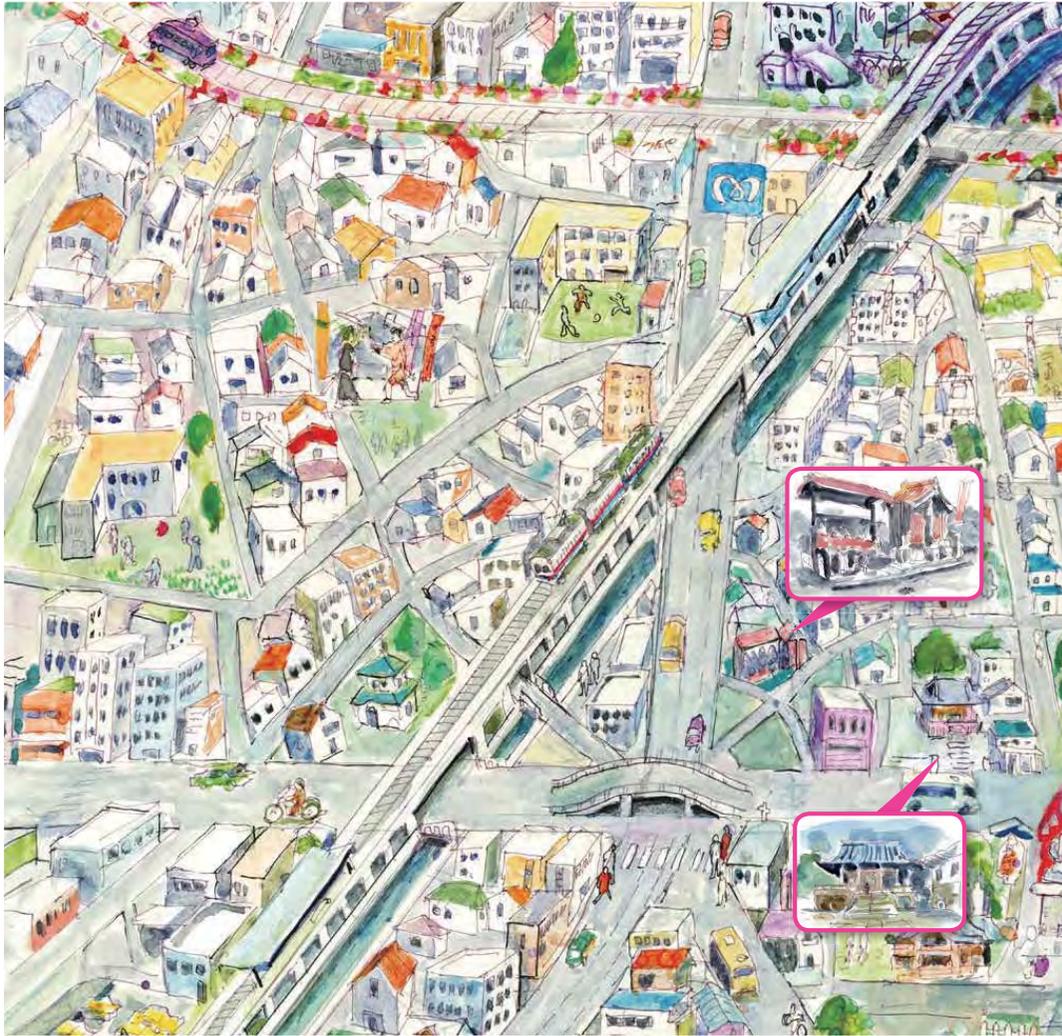
[荒川区と荒川と隅田川]

今、荒川とよばれている川は、こう水をふせぐため明治時代に新しくつくられた川です。その前までは、今の隅田川が荒川の本流でした。荒川と隅田川は、北区にある岩淵水門で分かれています。荒川区の人びとは、昔から荒川（今の隅田川）にささえられながらくらししてきました。この本では荒川区を5つの地区に分けて、人びとの古い記憶をたどりながら、荒川のめぐみとともにしょうかいします。

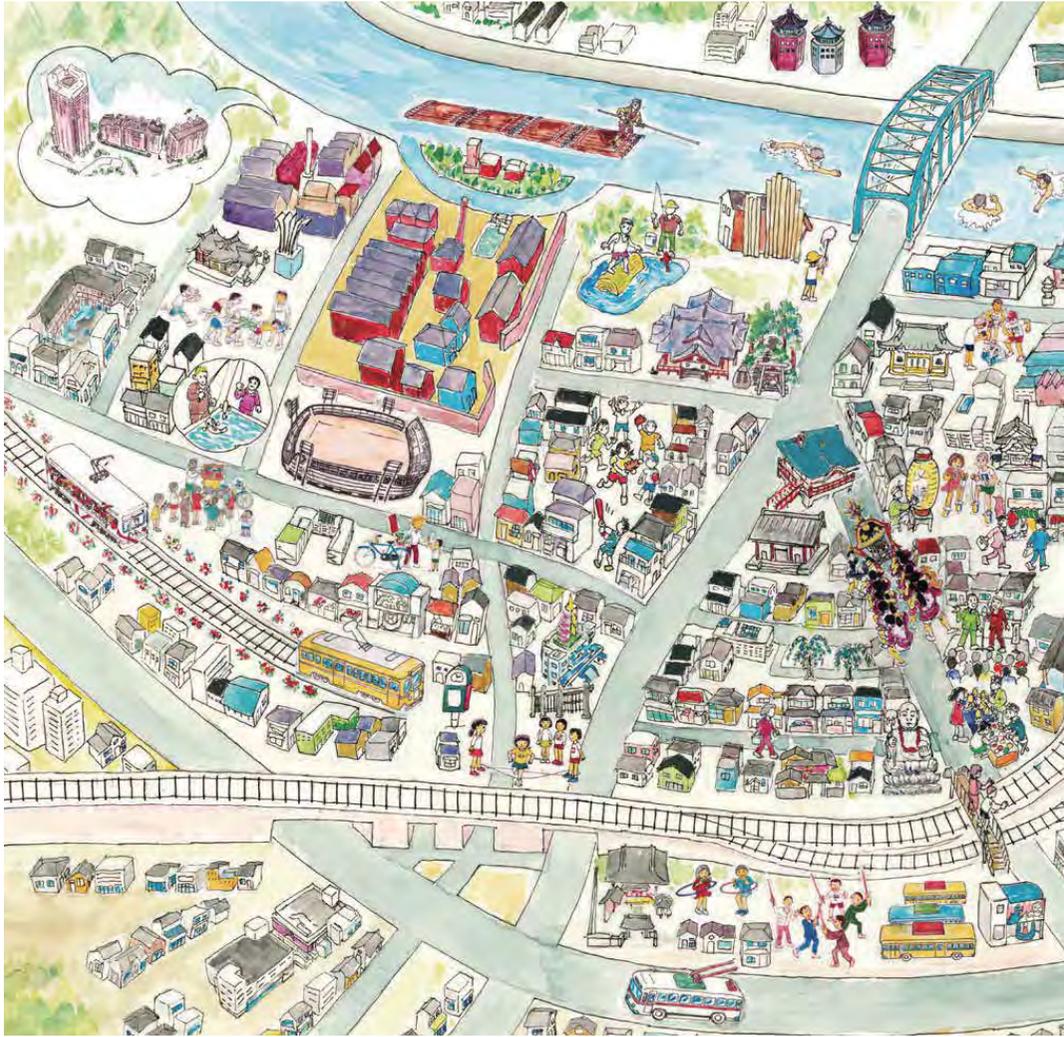




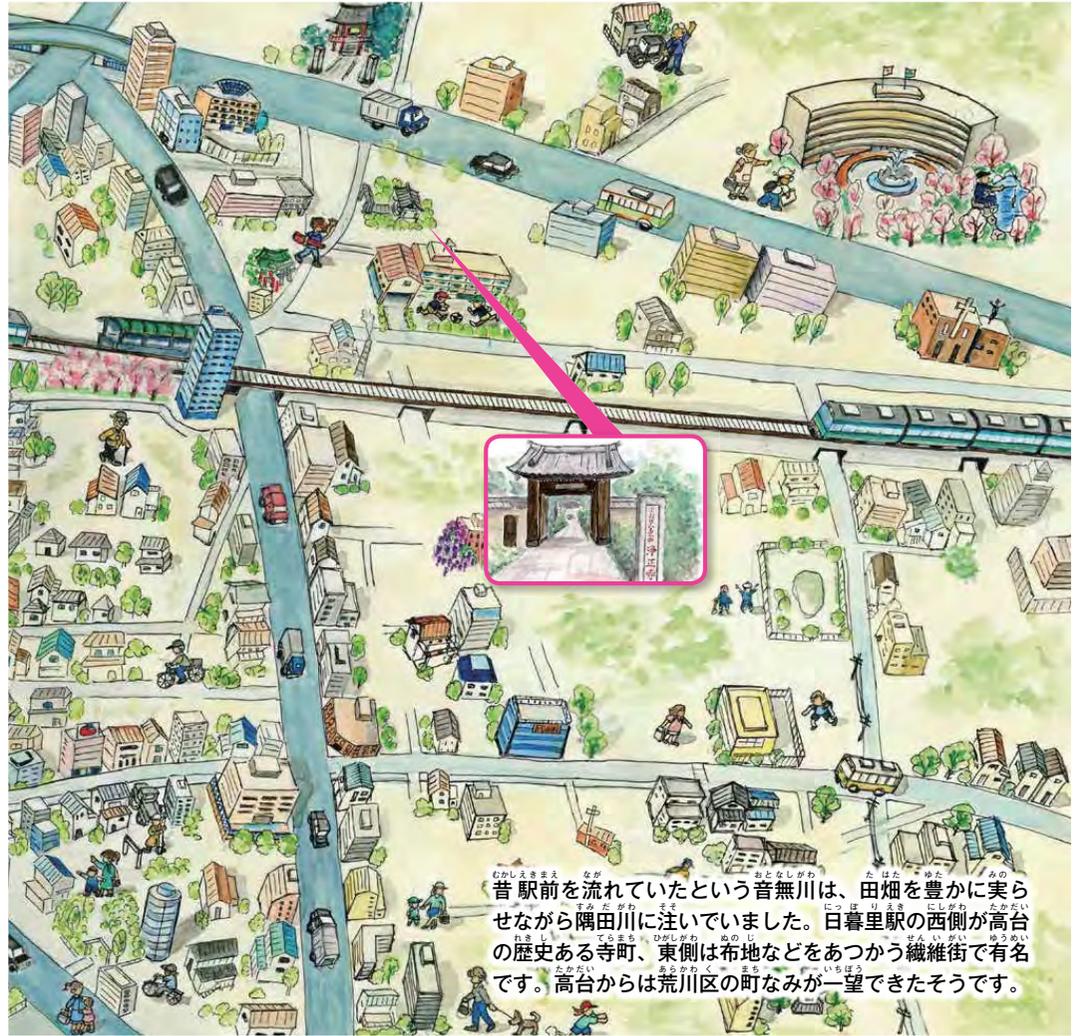
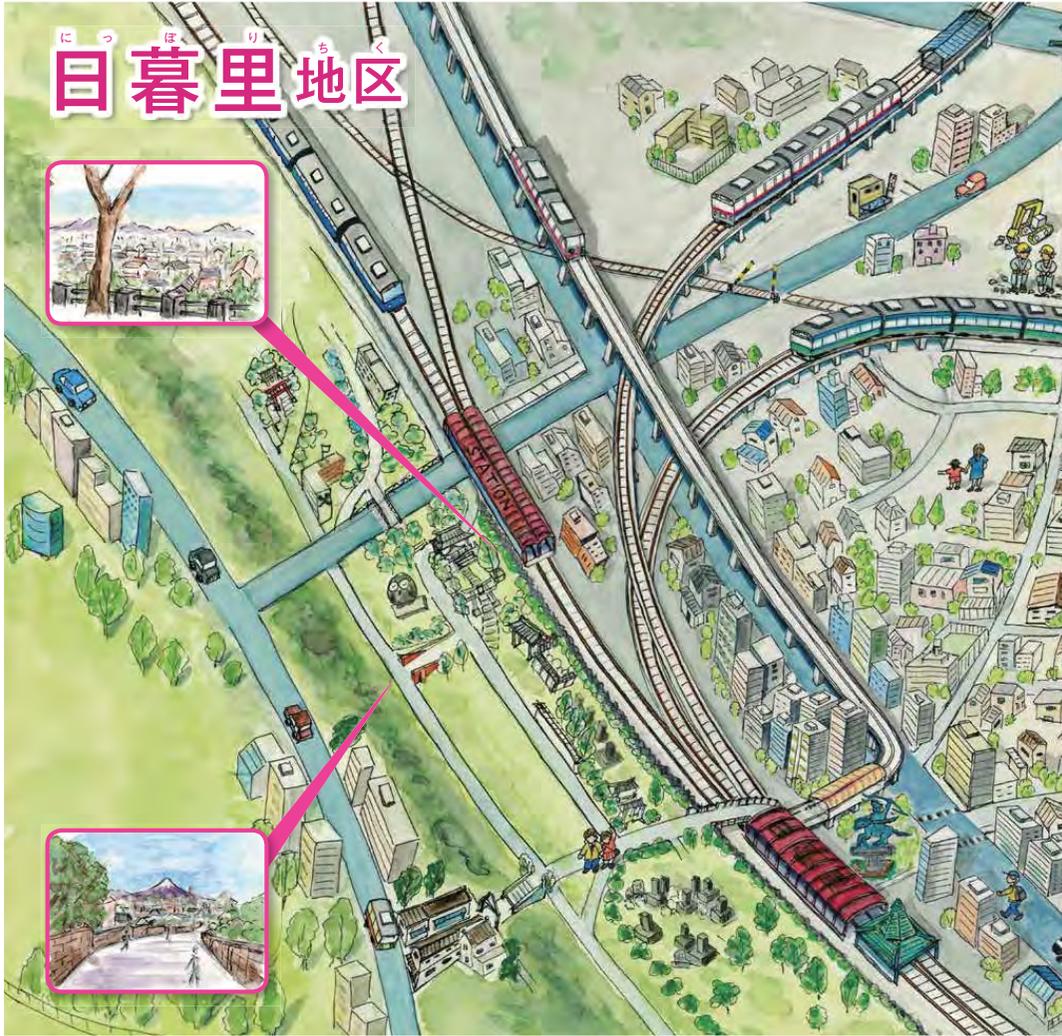




隅田川に面して、日本で最初の近代的な水処理センターがあります。きれいになった水は隅田川に放水され、川をより豊かにしています。荒川区役所があり、区内でいちばん人口の多いエリアです。



日暮里地区



昔駅前を流れていたという音無川は、田畑を豊かに実らせながら隅田川に注いでいました。日暮里駅の西側が高台の歴史ある寺町、東側は布地などをあつかう繊維街で有名です。高台からは荒川区の町なみが一望できたそうです。



川にはボンボン船、
陸にはチンチン電車

かつて、カバンや自転車部品をつくる工場が建ちならび、ものづくりの町としてさかえた荒川区の下町には、多くの人々が暮らし、活気に満ちていました。

川には、荷物を運ぶボンボン船や、人々を乗せる渡し船が行きかい、陸には、今も活やくするチンチン電車「都電荒川線」が、元気に走っていたのです。



くらしの中に、
いろんな音があふれていた

荒川区には、大都市東京の下町ならではの風景と、そこにくらすたくさんの人々がかなでる、ゆたかな音が満ちていました。



チンドンチンドン、チリンチリン、
ワッショイワッショイ、ピーヒャララ

どこかに新しい店が開店すれば、かねとたいこをならしながらチンドン屋さんが宣伝にやってきました。夏になれば、リヤカーを引いてふうりん屋さんがきました。そして祭りになればみこしがやってきて、ほんおどりにふえ・たいこがなりびきました。町には、いつもにぎやかなくらしの音があふれていたのです。





ひとひと
人と人がささえあう
下町人情と、暮らし

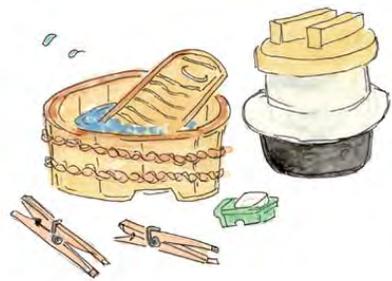
江戸の昔から、下町の名物といえはあつい人情でした。
荒川区に住む人たちは、人と人のつながりを、
なによりも大切にしていました。

家族も近所も助けあい、
苦勞も楽しみも、みんないっしょに

1950年ごろまで、電気すいはん器も洗たく機も、ほとんどの家には
ありませんでした。おかまでご飯をたき、洗たく板を使って手でゴ
ゴシ洗たく物を洗っていたのです。

今よりもずっと大変でしたが、家族や近所の人たちがおたがいに助
けあってくらしていました。

年末の大そうじやもちつきも、町内で声をかけあって、いっせいに
行うことが多かったのです。



テレビにミシン、自動車も……
便利になっても、人情はなくなる

1950年代後半になると、下町のくらしは大きく変わってきました。
どの家でも電気すいはん器やミシンを使うようになり、オート三輪や自動車が、チンチ
ン電車とならんで道路を走るようになったのです。そして、「三種の神器」と呼ばれる電
化製品（白黒テレビ、冷蔵庫、洗たく機）もあらわれ、生活は
とても便利になりました。

しかしそれでも、下町の人々
は、人情や人のつながりを大切
にしました。そしてそれは、今
もつづいています。



荒川に深く根づいた 歴史と文化

荒川のめぐみを受け、またこう水になやまされながら、
長年人々が住みくらし荒川区には、
古い伝統をもつ建物やお祭りなどが、今も残っています。



素盞雄神社のみこしぶり、 失われた夏のちょうちん行列

南千住の素盞雄神社は、1200年以上の歴史をもつといわれ、江戸時代には川をはさんで「千住大橋つな引き」という行事がありました。今でも「天王様」として親しまれています。3年に1度かつがれる宮みこしは、屋根のかざりが地面に着くくらいはげしくふられることで有名です。

いっぽう、夏のおぼんに行われていたちょうちん行列は、今は見られなくなってしまいました。これは、ちょうちんに火をともし、「おぼんのちょうちんヨイヤサッサー」といいながら練りあるき、ご先祖さまをねぎらう行事でした。



今も残る明治・ 大正の文化遺産

明治時代にひらかれた千住製絨所は、日本で最初に洋服の生地を生産した工場です。今はもう工場はありませんが、レンガのへいはまだ残っています。

大正時代にできた三河島汚水処分場（現三河島水再生センター）は、近代的な下水道がはじめて整えられたころの設備といわれ、ポンプ場は国の重要文化財になっています。



火事の多かった江戸に 木材を送りとどけた荒川

江戸で使われる木材の多くが秩父のものであったことから、荒川を通じて秩父と江戸は直接結ばれていました。

六地藏のふしぎな いいつたえ

「宮地六地藏」の名で親しまれている宮地のお地藏さまは、6体なのになぜか六地藏といわれています。





子どもたちの遊びと楽しみ、 そして毎日のすごしかた



荒川区の下町には、
子どもたちが元気に遊ぶ声が
いつもひびいていました。

駄菓子屋は子どものつどう場所、
夏には川がプールに早がわり

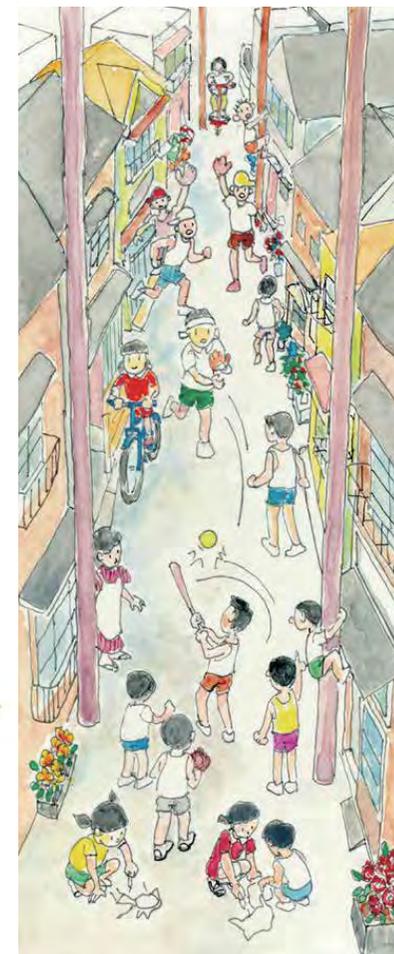
学校から帰ると、子どもたちはおこづかいをもって駄菓子屋に走りました。くじのついたおかしにドキドキし、小麦粉とべにショウガだけのもんじゃ焼きを味わい、ときにはお店のおばちゃんにしかられながら、楽しくすごしていたのです。

また、夏になると、川に「水練場」という名のプールができて、子どもたちに大人気でした。

みんな、遊びの天才！ 熱中した遊びの数々

ベーゴマ、けん玉、チャンバラごっこ。ゴムとび、ぬり絵にフラフープ。そしてカンゲたや馬とび。昔の子どもたちは、たくさんの遊びを生みだし、それに熱中しました。

どこでも遊びましたが、いちばん人気があった場所は路地です。ときどき車が土ぼこりをあげて通りましたが、せまい路地でする三角ベースの野球やカンゲりが、なぜかとても楽しかったのです。





《森里川海ふるさと絵本》

ありがとう あらかわ ―荒川区―

2019年3月5日 初版発行

発行……………環境省 「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム

〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2

環境省 自然環境局 自然環境計画課

電話03-3581-3351（代表）

印刷製本…………… 図書印刷株式会社

©環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム 2019 Printed in Japan

ISBN978-4-9910599-2-6

作画…………… 新井鋭機（扉）／多田浩二（2-3ページ）／新井鋭機、斉藤緑（4-5ページ）／

遠藤伸也、鈴木孝子、伊藤宅子（6-7ページ）／熊谷勲、西尾紀子（8-9ページ）／

鈴木俊男（10-11ページ）／多田浩二、松本喜代子（12-13ページ）／新

井鋭機（14-15ページ）／伊藤宅子（16-17ページ）／熊谷勲（18-19ページ）／

鈴木俊男（20-21ページ）

荒川区の小学生の皆さん（22-23ページ）

資料提供…………… 小寺千三郎、飯田圭子、種村ひろ子、柴田直美、池田幸子

荒川鳥獣園…………… 袴田一夫

文…………… 大崎梯造（14-21ページ）

装幀・デザイン… 齋藤視俊子（アースメディア）

編集協力…………… 山本高幸

企画制作

一般社団法人緑守の森コミュニティ推進協議会

（宮下佳廣、鳥海正美、萩原徹、成田芳生）

荒川区ふるさと絵本制作委員会

（杉山六郎、脇田弘、多田浩二、小寺千三郎、遠藤伸

也、松本喜代子、飯田圭子、種村ひろ子、柴田直美、

池田幸子）

企画制作協力

荒川コミュニティカレッジ

公益財団法人荒川区自治総合研究所

東京都立産業技術高等専門学校

荒川区立第六日暮里小学校

公益社団法人日本環境教育フォーラム

監修

広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）

心象図法指導

上田洋平（滋賀県立大学地域共生センター助教）

読み聞かせ指導

安富ゆかり（JPIC読書アドバイザー／絵本専門士）

協力

安立千恵子、井草実、池田路子、石田のどか、居田政

則、今井完、生方俊典、太田元次郎、小川安二、奥野

勇、加藤由真、川本弘、京極徹、郡司美穂子、小林和

夫、島上絹子、榎上和寿、千葉真知子、成山博子、新

澤米次、西田寿美枝、沼倉トシ子、野尻かおる、橋本

辰夫、深作妙子、山口智子、渡辺康一、渡辺忠雄（五十

音順）

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトとは？

きれいな空気と澄んだ水、美しく心地よい緑、安全でおいしい食べもの。私たちの暮らしに欠かせないこれらの恵みは、森・里・川・海のつながりが生み出したものです。しかし今、そのつながりが急速に失われています。

大人も子どもも、都市も地方も、みんなで森里川海を支える社会をつくることができれば、森里川海からの恵みはいつまでももたらされ、私たちは心豊かに暮らせるようになります。そんな思いから、環境省では2014年12月に「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを始動し、行政、関係団体、企業、専門家など様々な人たちと協力して、地域を元気にする取り組みを行っています。

※プロジェクトHPはこちら

<https://www.env.go.jp/nature/morisatokawaumi/>



「森里川海ふるさと絵本」『ありがとう あらかわ―荒川区―』は、こうしてつくられました

絵本は、荒川の上流と下流であり、姉妹都市である秩父市と荒川区それぞれのふるさとの記憶から荒川の恵みと地域の生活を考えるために、「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトの一つの取り組みとして制作したものです。

絵本づくりは、関東平野を流れる荒川が人々の暮らしにどんな恵みをもたらしてきたのだろうといった思いをめぐらせることからスタートしました。

荒川の恵みとふるさとの記憶を復元するため、地域に暮らす老若男女が集い、それぞれの五感体験・生活体験に関する記憶を語り合いながら、有識者の指導のもとに人々の心の底にしみついたふるさとの記憶を言葉に置きかえていきました。

絵本は、こうしてつむぎ出された多くの言葉が複数の有志の画家の手によって絵画化され、地域に暮らす老若男女の数々の記憶が凝縮されたものとなりました。

また、地域の子どもたちによる「未来の荒川」をイメージした絵画作品が巻末を飾っています。

自然とそこに生きる人々の関わりについて、過去の記憶をたどり未来に思いを馳せることで、現在の私たちの暮らしがより豊かになることの一助になれば幸いです。



荒川は、秩父市の1てきの水からスタートします。埼玉県を横切って、東京の荒川区を通り、東京湾のゴールまで173km。はるかな昔から、人びとは荒川のめぐみを受けてくらししてきました。



環境省